

こい所でした。ここでカミナリに遭ったのだ……！！西穂へとまるでカミソリの刃のように冷たく続く稜線と、岐阜県側と長野県側の崖下を独標の上からこわごわのぞきこみ、「安らかに眠ってくださいね」と呼びかけました。久しぶりの同期のみなさんとの再会。それぞれが40年の年を経てこうして同じ目的で一緒に行動した今回の追悼登山。私も長年の心のつかえがとれ、少し軽くなりました。鈴岡さんはじめ、実行委員会のみなさん、高橋校長先生、現役の山岳部のみなさん、本当にありがとうございました。

## 長森 恵

仕事の関係で昨年より長野市に在住。「母親の単身赴任」も10年程となる。

あの時以後、独標には数回登っているが、8月1日には行かねばという気持ちには強いものがあり、今年のご案内があり、単独で直行することをすぐ決めた。

その後、逢沢さんと連絡を取り、当日は本隊と合流することができた。当初より、悪天候は予想されたが、どしゃぶりになっても行く様子の逢沢さんの言葉が心地よかった。

40年前のあの日のことは、思い出すということではなく、いろんなことが鮮明に脳の中にある。私はバテ、西穂山荘で本隊を待っていた。すごい雨となり、山荘に皆避難をしている中、柳原先生が、すごい勢いで駆け込んで来られ救助を訴えた。皆が登っていった。柳原先生も来た道を即、折り返し登っていかれた。その駆け下り駆け上っていった急斜面を、先生の気持ちをかみ締めながら登る。

独標は、いつ行っても悲しい場所だ。今年、やっと8月1日に慰霊をすることができた。

当日、在校生の山岳部の子たちも登ってきてくれていた。本当に若いかわいらしい子たちだった。40年前の11人の若さを思った。

帰りはほとんどどしゃぶりだった。西穂も見納めというところで、雨が上がり西穂、独標がはつきり姿を現した。彼らがいると感じる。

これからも、今までと同じように「8月1日」は「8月1日だ」と思い生きていく。

